東京未来大学研究紀要 *Vol.18* 2024.3 pp.85 − 94

原著

絵本・紙芝居における「ぶんぶくちゃがま」の変遷
―1945年以降の作品を中心に―

佐々木　由美子[1)]

A Study on Transition of “Bunbukuchagama” in Picture Books: Focusing on the Works after 1945

Yumiko Sasaki

要　旨

本研究は、昔話の再話や受容のありようについて、保育との関わりの中で明らかにすることを目的としている。その手がかりとして、「ぶんぶくちゃがま」を取り上げ、その変遷を追った継続研究である。1945年以降の絵本や紙芝居を中心に分析し、その変遷をみていった結果、大きな変化が認められた。一つは物語構造の変化であり、二つ目は中心場面の変化である。物語が簡略化し、構造自体が変化することによって、物語自体がわかりやすくなるとともに、人と動物の交流や友情、親切といったテーマをより鮮明に描きだそうとする傾向がみられた。また、中心場面については小僧さんたちが茶釜を追いかけ回す場面が描かれなくなり、見世物の場面は見開き１頁で、つなわたりが中心として描かれ、見世物の固定化の傾向は強まっていると言える。

キーワード：昔話・昔話絵本、「文福茶釜」、変遷、保育

1．はじめに

（1）問題の所在と研究目的

子どもたちの昔話離れが指摘されて久しい。家庭における童話や昔話について調査した水野・徳田（2021）によると、童話や昔話絵本の家庭における所有率は、1990年から10年ごとに低下し、2020年の調査では、これまで比較的所有率の高かった「ももたろう」「赤ずきん」「さるかに合戦」等の減少も顕著で、所有率40％を超えた作品は皆無であったという。この30年の間に、童話や昔話絵本が家庭から姿を消しつつあることを指摘している[1]。

当然、昔話離れは子どもだけではなく、保護者や保育者のなかにもみられる。保育者養成校の学生に聞いても、実習先で子どもたちに昔話絵本を読み聞かせることに躊躇するといった意見がある。昔話絵本よりも、もっと可愛らしく、子どもが喜ぶものを読みたいのだという。そうした傾向は、幼い頃昔話に親しんだ学生ではなく、あまり昔話を知らない学生に顕著にみられる。はたして、現代の子どもたちは昔話を喜ばないのだろうか。

昔話と保育との関わりについていえば、昔話は幼

１）佐々木由美子　　東京未来大学こども心理学部（Tokyo Future University）

児教育の始まりから、すでに保育の中で語られてきた。1876（明治９）年に開設された東京女子師範学校附属幼稚園では、関信三の訳した『幼稚園記』（1876）に掲載された「渇鳥遂ニ水ヲ得ル」、「山羊橋上ニ諍闘ス」、「驕兎却て亀に後る」などグリム童話やイソップ寓話が語られていた。やがて幼稚園が軌道にのった頃、日本の昔話もこれに加わっていく[2]。1906（明治39）年の同幼稚園の「保育要項」には、「談話」として32話が掲載されているが、そこにはグリム童話やイソップ寓話に加え、「桃太郎」「舌切り雀」「浦島太郎」など日本の昔話も散見される[3]。こうした昔話は、1935（昭和10）年に刊行された、附属幼稚園の日々の保育計画を示した『系統的保育案の実際』のなかにも数多くみられ、創作童話が増える中にあっても、脈々と昔話が保育のなかで語られてきたことがわかる。

本研究は、昔話の再話や受容のありようについて、保育との関わりの中で明らかにすることを目的としている。その手がかりとして、「ぶんぶくちゃがま」（以下、「ぶんぶく」と略記）を取り上げ、その変遷を追った継続研究である。

「ぶんぶく」は、附属幼稚園で子どもたちが喜んだ話を集めた『幼児の楽しむお話』（1927）のなかに「文福茶釜」として収録されているだけでなく、『系統的保育案の実際』（1935）の年長組の保育案のなかにも記されていることから、幼稚園で実際に子どもたちに語られていたことがわかる。また、お話だけでなく、『大正幼年唱歌合本』（1925）においても「茶釜に手が生え足が生えノコノコ歩き出したので」と始まる唱歌「文福茶釜」（葛原しげる作詞、小松耕輔作曲）が収録されているほか、「チャカポコ　チャカポコ　チャカポンポン」ではじまる「ぶんぶく茶釜」（山北しげり作詞、中山晋平作曲）など「ぶんぶく」をテーマとした歌も複数曲つくられている。そのほか、劇遊びの台本や、「ぶんぶくちゃがまに火がついて」とうたう歌つきのあやとり遊びもあることから、かつてはかなり親しまれた昔話であったことがわかる。

現在においても、お話集や絵本として出版されてはいるものの、かなり認知度は低く、あまり好んで語られる昔話ではなくなってきている[4]。

本論に先立ち、昔話の再話に大きな影響を与えたとされる巌谷小波の「日本昔噺」叢書（1894－1896『文福茶釜』は叢書の第12編として刊行）以降から1945年までの期間に出版された「ぶんぶく」の変遷を分析した[5]。その結果、豆本等で伝わる話が、小波を経由することにより、ドラマチックな展開の部分は継承され、そうでない部分は消失する傾向にあることがわかった。逃げ出した茶釜を小僧たちが追いかけまわす場面や見世物小屋で茶釜が軽業をする場面など、動的で躍動感のある場面は好んで語られていた。

この時期に絵本化された作品はそれほど多くなく、５冊しか実見することはできなかったが、やはりその傾向は顕著で、小僧たちが茶釜を追いかけ回す場面や見世物小屋の場面は、複数頁にわたって描かれていた。特に小波作の絵本『ブンブクチヤガマ』（中西屋書店1911）は、見世物小屋の場面に見開き７ページを用い、三味線、綱渡り、足芸など５種類の芸を披露する様子が描かれていた。お話集と絵本では、絵本の方がより変化が現れるのが早い傾向もみられた。

本論においては、これらを踏まえ、1945年以降の絵本や紙芝居を中心に、その変遷をみていくこととする。

（2）研究方法

1945年以降に出版された「ぶんぶくちゃがま」の絵本および紙芝居の内容を分析する。また、幼児雑誌等に掲載された「ぶんぶく」も分析対象とした。

本論で分析対象としたのは、実見することができた70作品である。うち紙芝居は６作品である。

1945年以降の作品の変遷をみていくうえで、分析にあたって前回もちいた物語構造をもとにする。

なお、太字は巌谷小波が「日本昔噺」叢書の『文福茶釜』を再話するにあたって、豆本等で伝わる話

に書き加えた部分である。

①上野国舘林、茂林寺
②茶釜の登場
③和尚居眠り中の茶釜の異変
④弟子の訴え
⑤再び茶釜に異変
⑥茶釜を屑屋に売る
⑦屑屋にて夜中に異変
⑧茶釜の身の上話
⑨茶釜による見世物の提案
⑩見世物小屋の準備
⑪見世物小屋の大繁盛
⑫茶釜と屑屋の相談
⑬茶釜を茂林寺に奉納
⑭茶釜の後日談

2．物語構造の変化

1945年以降の絵本・紙芝居作品70冊を分析した結果、大きな変化が認められた。一つは物語構造の変化であり、二つ目は中心場面の変化である。まずは物語構造の変化についてみていく。

（1）簡略化

幼い子どもを対象とした絵本や紙芝居においては、物語構造がよりわかりやすく簡略化している点と、物語構造自体の変化が特徴としてあげられる。物語構造の簡略化についていえば、上記のモチーフのうち、①上野国舘林、茂林寺、③和尚居眠り中の茶釜の異変、④弟子の訴え、⑧茶釜の身の上話、⑩見世物小屋の準備、⑫茶釜と屑屋の相談、⑬茶釜を茂林寺に奉納、⑭茶釜の後日談の８つのモチーフが省略された作品が多くなる傾向がみられた。また、物語構造自体が簡略化されるだけでなく、語られる言葉も簡潔で、説明的な文章を含まない傾向がみられる。以下、物語の冒頭部分である。

（資料１）
むかし　むかしの　もりんじ　に、
あるひ　おしょうさん　ぽくぽく ぽく……
あさから　おきょうを　あげたとさ。おつとめ　おわった　おしょうさん、
「どれどれ　おちゃにしようか　の」
ちゃがまを　いろりに　かけたらば、ちゃがまに　てがでて　あしが　でて、あちちの　あちちと　いろりから　おにわへ　ぴょうんと　にげたとさ。
（小口吉太郎文、倉島泰絵『ぶんぶくちゃがま』春江堂1948 pp.1-2）

（資料２）
のどがかわいた、おちゃでも　のみましょう。
わあ　こうぶつかと　おもったら　どうぶつか。
（作者不明､鈴木寿雄絵「ぶんぶくちゃがま」『家庭エホン３（４）』博友社1948 頁数なし）

資料１は、朝のお勤めを終えた「もりんじ」の和尚さんがお茶を飲もうと、茶釜をいろりにかけたところ、いきなり茶釜から手足がでて逃げ出すところから物語がはじまっている。資料２では、それがさらに簡略化され、お茶を飲もうとしたら茶釜にタヌキの顔と尻尾がでたところから始まっている。いずれにしても、物語の冒頭でいきなり異変が起こり、これがどこで起こった出来事なのか、この不思議な茶釜がいったいいつ、どうしてお寺にあったのか等、こまかな状況は語られない。また、語られる言葉も資料１にみられるように､体言止めや「ぽくぽく」「あちちのあちち」などの擬音語・擬態語が使われ、端的でリズミカルな語り口になっているのがわかる。

茶釜がなぜお寺にあったのか。1945年以前にお話集等のなかで多くみられたのは、茶の湯の好きな和尚さんが、購入してきたという記述である。たとえば小学校１年生むきの作品では以下のように語られている。

（資料３）
ムカシ　コノ　モリンジトイフ　オテラノ　バウサンニ、チヤノユト　イツテ　オ客サマヲ

マネイテ　オチヤノ　ゴチサウヲ　スルコトガ　オスキデ、オチヤノ　ドウグヲ　アツメルコトヲ　ナニヨリモ　タノシミニシテヰタ　バウサンガ　アリマシタ。

アルトキ　コノ　オシヤウサンハ　ヨソカラ一ツノチヤガマヲ　カツテ　来マシタ。ソノチヤガマハ　ナカナカ　カツカウノヨイ　リツパナ　チヤガマデス。ヲシヤウサンハ　タイソウ　ヨロコンデ

「コンナ　リツパナ　チヤガマハ　ドコニモナカラウ。」ト　イツテ、人ガ来ルト　ダレニデモ　ミセテ、ソレヲ　ジマンニシテ　ヰマシタ。（小原國芳監修『セウガクブンコ　ブンブクチヤガマ　ジンジヤウ一ネン用』玉川學園出版部 1930 pp.3-4）

茶の湯が好きな和尚さんは、お茶の道具を集めることを趣味としており、購入した立派な茶釜を人に見せては自慢する様子も語られている。一方、今回分析対象とした絵本作品においては、なぜ茶釜が寺にあるのかが書かれた作品においても、以下のように簡潔に語られる。

（資料４）

もりんじの　おしょうさん　まちから　ちゃがまを　かってきた　さてと　いろりに　かけたらば　ちゃがまは　あちちとにげだした

（部鹿悦子文　若菜珪絵「ぶんぶくちゃがま」『かちかちやま・さるとかに・ぶんぶくちゃがま』主婦の友こども版28 主婦の友社1966 p.20）

和尚さんの茶の湯の趣味について特に語られることはなく、物語はそのままテンポよく進み、屑屋に売られた茶釜は、自身の身の上を語ることもなく、見世物で活躍し、屑屋に富をもたらすのである。茶釜と屑屋が相談して、見世物をやめることにする場面も削除されている。

簡略化されるなかで、「茂林寺」も、あまり登場しなくなっていく。今回対象とした作品には、同じ作者が複数の出版社で再話している場合もあり、同一作者の再話は同様の傾向を示すため、一概に作品数で比較をすることは難しいが、「茂林寺」が登場したのは70作品中20作品で３割弱である。そのうち1940年代５冊、1950年代が６冊と比較的多く登場し[6]、1960年代２冊、1970年代１冊、80年代１冊と、60年代以降減少していく傾向がみられる。

しかも、「茂林寺」が登場している作品においても、冒頭ではなく、物語の最後に由来譚のように「茂林寺」を登場させている作品もある。資料５に示す。

（資料５）

“もりんじ”と　いう　おてらには、いまでも　ちゃあんと　ぶんぶくちゃがまが、まつられているそうだ。（富安陽子文・植垣歩子絵『ぶんぶくちゃがま』小学館2010 頁数なし）

もちろんすべての「ぶんぶく」を網羅できているわけではない。しかし、1945年以前の絵本作品にもその兆候がみられたように、「茂林寺」という場所が消失していく傾向が1945年以降の作品においてはより明確に現れているといえる。

（２）物語構造の変化

物語や語り口が簡略化される一方、和尚さん（お寺）から物語が始まらない作品も増加している。すなわち、和尚さん（茂林寺あるいは単にお寺とされる場）から屑屋に渡った茶釜が、屑屋とともに見世物小屋で活躍し、屑屋に富をもたらした後、茂林寺（お寺）に奉納されるという「和尚さん（お寺）→屑屋→見世物→茂林寺（お寺）」という流れに変化が生じ、物語構造自体が変化しているのである。

物語は和尚さん（お寺）からではなく、親切な屑屋がタヌキを助けるところから始まる。屑屋に助けられたタヌキは恩を返そうと茶釜に化け、屑屋のかごに入り込むなど、古道具に紛れ込んで、屑屋の役に立とうとするのである。つまり「屑屋→お寺→屑

屋→見世物」という構造である。1945年以前の絵本作品にもこうした構造をもつ作品が見られたが、今回の対象作品中、屠屋から始まる作品は半数にのぼる。また、屠屋とタヌキから始まる物語のなかには、結末部分でお寺に奉納されることなく、そのまま屠屋とタヌキが仲良く幸せに暮らす作品も多い。

では、こうした物語構造の変化は何をもたらしたのだろうか。まずは、屠屋とタヌキの関わりの部分からみていきたい。

①屠屋とタヌキの関わり

屠屋とタヌキの関わりは、屠屋がタヌキを助けるところから始まる。屠屋がタヌキを助ける理由は大きく3つにわけることができる。

一つは、タヌキが子どもたちに捕まって、いじめられていたためである。

（資料6）

こどもが、たぬきを　つかまえて　あそんでいました。くずやさんが　かわいそうに　おもって、「ぼうや、その　たぬきを　うっておくれ。」と　いって、たぬきを　かって　にがして　やりました。

（坪田譲治文、鈴木寿雄絵「ぶんぶくちゃがま」『たのしい一年生』２（７）講談社1957 p.31）

（資料7）

むかし、あるところに、まずしいおじいさんがいました。ある日のこと、仕事を終えて、山からおりてくると、わいわいさわいでいる子どもたちに出会いました。見ると、一ぴきのたぬきをつかまえて、いじめています。

「これ、なんてことをするのだ。やめなさい」

おじいさんは、子どもたちにお金をやって、たぬきをはなしてもらいました。

（伊藤海彦文・奈良坂智子絵　紙芝居『ぶんくちゃがま』NHKサービスセンター 1979 1−2場面）

資料6・7にみられるように、子どもたちがタヌキをいじめているところに出くわした屠屋さん、あるいは貧しいおじいさんは、タヌキを不憫に思い、なけなしのお金を子どもたちに渡して、タヌキを助けるのである。絵ではいずれも複数人の子どもに囲まれ、縄で縛られ引っ張られたり、叩かれたりしているタヌキが描かれている（図1）。

図1 タヌキをいじめる子どもたち（表紙）
（伊藤海彦文・奈良坂智子絵NHKサービスセンター）

二つ目は、タヌキがわなにかかっていたのを見かけたためである。この理由が最も多い。

（資料8）

しょうじきものの　くづやさんが　やまみちを　あるいて　いると　いっぴきの　こだぬきが　わなに　かかって　ないて　いるので　かわいそうにおもって　なわを　といてやりました。

（奈良次雄著『ぶんぶくちゃがま』トモブックス社1952 p.1）

そして三つ目は、おじいさんとタヌキがもともと顔見知りで仲良しだったからである。おじいさんは、とても貧しい暮らしをしながらも、正直者で心優しく、資料9のようにタヌキとの交友を心から楽しんでいる。

（資料9）

この　たぬきは　おじいさんの　ともだちで、ときどき　いっしょに　ごはんを　たべたり、

おさけを　のんだりします
（西本鶏介文・宮本忠夫絵『ぶんぶくちゃがま』チャイルド本社1999 p.1）

（資料10）
じんべいさんの　はたけは　せまいので、なにもかも　ほんの　すこししか　とれませんでした。うらやまを　くずして　はたけを　ひろげさえ　すれば、びんぼうで　なくなるのでした。ところが、
「いんや　いんや。それは　できんよ。うらやまには　なじみの　たぬきが、ながいこと　すみついているからなあ。」
（筒井敬介文・清水耕蔵絵『ぶんぶくちゃがま』小学館1976 p.1）

資料10は、あまりに貧乏なのをみかねて、裏山を崩して畑を広げるように勧められたおじいさんが、裏山には「なじみのたぬき」がいることを理由に断るのである。

仲良しのタヌキは、食べるものにも困窮しているおじいさんを助けるために茶釜に化け、和尚さんに自分を売るように進めるのである。

②物語構造の変化がもたらしたもの

では、このようにタヌキと屠屋の物語から始まることで、物語にどのような変化が起きているのか。まず、屠屋に助けられたタヌキがその恩を返すという動物報恩譚としての輪郭がより明確になり、人間と動物の交流や友情という要素が強くなっていることがわかる。

もともと、「ぶんぶく」には狐狸報恩譚、古狸が化けた守鶴和尚伝説、京東山化け狐の伝説の３つの系統があるとされている[7]。３つの系統が伝承されるうちに混ざりあったためか、なぜ「ぶんぶく茶釜」と呼ばれるのか、なぜ茶釜は売られた先の屠屋に富をもたらすのかなど、はっきりしない部分が多かった。1945年以前の作品においても「ぶんぶく茶釜」の由来が語られることは稀であったが、今回の分析作品においても、特に説明なく「ぶんぶく」という名前として扱うことが一般的になっている。

また、なぜ屠屋に富をもたらしたのか。1945年以前の変遷のなかでは、そのわかりにくさを補うため、屠屋の性格の追加がみられたのではないかと考察した。茶釜からの恩恵を受けるため、屠屋を良い人物として描く必要があったからと考えたためである。しかし、今回みたように、屠屋がタヌキを助ける場面、あるいは屠屋とタヌキの親交の場面から始まることで、なぜ屠屋に富をもたらすのかは明確な道筋をもって示される。物語の構造が変化したことによって、タヌキの身の上話（⑧）も、身の上話を親身になって聞くなかで表現される屠屋の人柄の描写も必要なくなったといえる。

動物報恩譚としての輪郭がより明確になったことと、人間と動物の交流や友情という要素が強くなったことにより、屠屋とタヌキの性格も自ずと鮮明になっている。屠屋に助けられたタヌキは、次のように描かれる。

（資料11）
たぬきは　わかものに　あたまを　さげると、いいました。
「おかげで　いのちびろいしました。これから、わたしが　ちゃがまに　ばけますから、どこかへ　うってください。たすけてくれた　おれいです。」
（中脇初枝文・林桂子絵『ぶんぶくちゃがま』ポプラ社2019 p.4）

（資料12）
「じい。だまって聞いてくれ。おれは、いつもじいに、のこりものを、食べさせてもらっているたぬきだ。きょうは、おんがえしをしようと思って、文福茶がまに、ばけてきたんだ」
（藤井いづみ文・林恭三絵『日本名作絵本　文福茶がま』TBS ブリタニカ1993 p.1）

資料11・12のように、自分を売ることで屑屋に恩を返そうとするタヌキからは、情に厚く律儀で健気な性格が伝わってくる。

一方、屑屋の方はタヌキが化けた茶釜を売るのに躊躇う姿や、逆に茶釜がタヌキであると気付かないまま、お世話になっている和尚さんにあげてしまう姿も描かれる。

（資料13）

「だがのう。ひとを　だますのは　いかんな」

「だましたりは　せん。このまま　ずっと、ちゃがまで　いますさ」

（望月正子文･二俣英五郎絵『ぶんぶくちゃがま』世界文化社2005 p.8）

資料13では、タヌキが化けた茶釜を売ることは人を騙すことになると戸惑うおじいさんの姿が描かれる。しかも、おじいさんは和尚さんに茶釜を値切られても不平一つも言わず、むしろ、お寺に残していく「たぬきの　ことを　あんじながら、かえって」いくのである（資料13 p.10）。

一方、助けられたタヌキが恩返しのために、何も告げずに茶釜に化けて古道具に紛れ込んだ話では、屑屋は立派な茶釜をみて、それで利益を得ようともせず、お世話になっているお寺の和尚さんにあげることにするのである。

（資料14）

「りっぱな　ちゃがまだ。おてらの　おしょうさんに　あげる　ことにしよう。」

　おじさんは、ちゃがまを　かかえて、 おてらへ　いきました。

「こんな　ものを　ひろって　きました。どうぞ、おてらで　おつかい　ください。」

（平塚武二文・石井健之絵『ぶんぶくちゃがま』講談社1960 p.13）

そのため正体を現した茶釜は屑屋のもとに返却され、タヌキと知らずに売ってしまった話では、屑屋が和尚さんにお金を返して詫びることになるのである。

心優しく欲のない屑屋と、助けてもらった恩をなんとか返したいとがんばる健気で愛らしいタヌキの姿が強調される傾向がみられるのである。

こうした変化は、幼い子どもたちにとっても物語がわかりやすいだけでなく、友情や親切といった大切なテーマがより伝わりやすい形になっているといえる。

3．中心場面の変化

さて、1945年以降の絵本･紙芝居作品においては、物語構造が変化しただけでなく、物語の山場ともいえる中心場面にも変化がみられる。

1945年以前の絵本作品においては、小僧さんたちが茶釜を追いかけ回す場面や見世物小屋の場面が、複数頁をもちいて描かれていた。小僧さんたちが茶釜を追いかけ回す場面は物語前半部分の、そして見世物小屋の場面は後半部分の山場だともいえる。見世物小屋の場面は見開き１ページで綱渡りに固定化される作品が増える一方、茶釜を追いかけ回すどたばたした場面は1950年代には多くみられるが、60年代以降はかなり少なくなる。

以下､詳しく見ていくこととする。1940 ～ 50年代、茶釜を追いかけ回す様子は以下のように描かれる。

（資料15）

「たぬきに　ばけたぞ　ばけちゃがま　にがすな　それきた　いけどり　だ」 こぞうさん

はちまき　ほうき　もち　あっちだ　こっちだ

　そら　そこだ　ひろい　おてらを　かけまわり　とうとう　とらえたばけちゃがま

（車三平作『文福茶釜』青樹社1949 頁数なし）

（資料16）

「それそれ　むこうへ　にげて　いく　こんどは　こっちだ　はやく　しろ」

おてらの　なかは　おおさわぎ
（巌谷小波文・川上四郎絵『文福茶釜』トッパン1954 頁数なし　図2）

図2 茶釜を追いかける小僧さんたち（表紙）
巌谷小波文・川上四郎絵『文福茶釜』トッパン

資料15・16にみられるように、テンポのよい文章に、小僧さんたちがそれぞれ手にほうきや、はたき、バチをもって、茶釜をおいかけまわす絵が描かれ、読者にとってはユーモラスでかつ、ハラハラさせられるダイナミックな場面として、好んで描かれていた。どの作品も同じように小僧さんがほうきやはたきを持ち、絵も定型化されていたといえる。

しかし、1960年以降、その場面に代わって多く描かれるようになったのは、小僧さんが茶釜を洗う場面である。

小僧さんがゴシゴシと茶釜を洗っていると、茶釜が痛いとしゃべりだすのである。

（資料17）
そこで　こぞうさんは　さっそく　いどばたで　ちゃがまを　ごしごし　あらいはじめました。
すると　とつぜん、
「いたいよ　いたいよ。おしりの　かわが　むけちゃうよ」
ちゃがまが　さけびました。
こぞうさんは　びっくり・・・・。
（西本鶏介文・飯野和好絵『ぶんぶくちゃがま』鈴木出版1994 p.16）

（資料18）
おしょうさんは、こぞうたちに、かわで　ちゃがまを　あらわせます。
ごし　ごし　ごし　ごし。
「だめ　だめ　だめ　だめ」
ごし　ごし　ごし　ごし。
「くす　くす　くす　くす。くすぐったーい・・・」
さあ　とびあがって　びっくりした　こぞうたち。
「たいへんだあ、ちゃがまが　ちゃがまが　くちを　きいたよう」
（筒井敬介文・井上洋介絵『ぶんぶくちゃがま』ミキハウス1987 頁数なし）

資料17・18にみられるように「いたいよ　いたいよ」といった声や「だめ　だめ」「くす　くす」といった声が茶釜から聞こえてきて、小僧さんがびっくりするのである。そのやりとりもまたユーモアに満ちている。

1960年代以降、茶釜を追いかけ回す場面が描かれなくなっていくのは、ほうきをもって動物を追いかけ回す姿が、子どもにとって好ましくないという判断も働いたのかもしれない。

一方、見世物の場面は見開き1頁で、多くの観衆の見守る中、華やかな場面として描かれる。軽業はつなわたりが中心であり、固定化の傾向はさらに強まっているといえる。基本は扇子と唐傘を持って綱渡りをする姿であるが、それに高下駄を履いていたり、皿回しをしながらつなわたりをするなどもみられる。このつなわたりの場面が多くの絵本の表紙も飾っている。（図3、4、5、6）

図3 たまお文・絵（まるまん出版社1951 国立国会図書館所蔵）

図4 平塚武二文・石井健之絵（講談社1960）

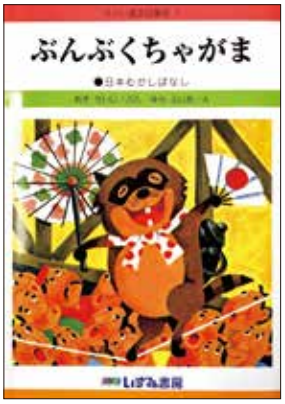

図5 あきせいじ文・ゆらふじお絵（いずみ書房1974）

図6 富安陽子文・稲垣歩子絵（小学館2010）

4．おわりに

以上、1945年以降の絵本や紙芝居を中心に分析してきた。今回の調査において、物語構造の変化と中心場面の変化という二つの大きな変化を確認することができた。

また、物語が簡略化し、構造自体が変化することによって、物語自体がわかりやすくなるとともに、人と動物の交流や友情、親切といった大切なテーマをより鮮明に描きだそうとする傾向がみられた。かつて物語の山場であった小僧さんたちが茶釜を追いかけ回す場面が描かれなくなっていったのも、動物を虐待しているかのような場面は、交流や友情、親切といったテーマとそぐわないという判断もあったのではないかと思われる。幼い子どもたちに語る、伝えるという意識や行為のなかで、こうした変化が起こってきているといえるのではないだろうか。

平塚武二（1960）は「ぶんぶく」について、「助けられたから恩がえしをしたというようなことではなしに、人とけものとは友だちになれるという、ほおえましい話です。幼児のために役立てることができましょう」[8]と述べているが、1945年以降の「ぶんぶく」が、幼い子どもをより意識し、何を伝えようとしていたのかの一端がうかがわれる言葉である。

では、なぜ「ぶんぶく」はかつてほど読まれなくなったのだろうか。昔話は現代の子どもたちにはなじみのないものが多く登場するが、「ぶんぶく」はお寺、和尚さん、茶釜、屑屋さん、見世物など、なじみのない素材が特に多いことも関係しているかもしれない。波多野勤子（1959）は『ぶんぶくちゃがま』（小学館育児絵本）のあとがきで次のように述べている。

（資料19）

> このお話は、ちゃがま・お寺・おしょうさんなど、お子さまたちとはかけはなれた、しかも古めかしい素材をつかっているにもかかわらず、お子さまを、よろこばせることができるのは、このお話のもつ機知・こっけいに近代性があるからだと思います。この絵本では、ぶんぶくちゃがまを、くずやさんの子にしたり、見世物を、サーカスとしたりして、いっそう、近代的に脚色しました。
>
> （波多野勤子「おかあさまがたへ」『小学館の育児絵本　ぶんぶくちゃがま』小学館1959 p.1）

1959年の時点でも子どもとかけ離れた「古めかしい素材」という言葉がみられ、比較的大胆な書き直しを行なっている。「わたしを　うちの　こに　してくださいね」というタヌキのセリフを加え、タヌキを屑屋さんの家の子どもにしている。屑屋に売られたタヌキだが、屑屋とタヌキは隷属的な関係でも雇用関係でもなく、屑屋さんの家の子どもなのである。

これも当時の教育観が反映されていると思われる。

昔話は、長い時をへて伝えられてきたお話である。読み継がれる昔話と、忘れ去られていく昔話では何が、どう異なるのだろうか。この点については今後の課題として、読み継がれている昔話等との比較もしながら、引き続き調査していきたい。また、今回は、全体の変化の傾向を見るにとどまり、絵本と紙芝居の違い等にもふれることができなかった。この点についても、今後の課題としたい。

引用文献

1　徳田克己ほか（2001）「童話や昔話が身近な存在でなくなった現在の子どもたちⅠ・Ⅱ」、「幼児の昔話に関する知識」『日本保育学会大会研究論文集』54、水野智美・徳田克己（2021）「家庭における幼児の童話・昔話離れ現象の実態」『実践人間学』12等

2　倉橋惣三・新庄よし子（1930）『日本の幼稚園』（初版：東洋図書、新訂版：フレーベル館1956、復刻版：臨川書店1983）p.214
幼稚園の基礎が固められ、保育に余裕ができた頃、日本にも古来から幼児向きの話が存在していることに気がつき、日本の昔話を取り入れたのだと述べている。

3　文部省（1979）『幼稚園教育百年史』ひかりのくに p.956

4　先述した、水野智美・徳田克己（2021）の調査において、「ももたろう」、「おむすびころりん」、「花さかじいさん」、「白雪姫」など国内外の昔話や童話21話を対象として調査しているが、「ぶんぶく」はその調査対象としても挙げられていない。

5　相澤京子・佐々木由美子（2023）「「ぶんぶくちゃがま」の変遷－1895年から1945年までの作品を中心に」『未来の保育と教育』10号

6　「茂林寺」が登場する1940～50年代の作品は以下の通りである。

・ワタナベテツヲ文、スズキトシヲ絵『ぶんぶく茶釜』（文新社書店1947）
・小口吉太郎文、倉島泰絵『ぶんぶくちゃがま』（春江堂1948）
・奈街三郎文、大森弓麿絵『ぶんぶくちゃがま』（新子供社1949）
・木村貞美文・絵『ぶんぶくちゃがま』（錦城社1949）
・高野哲治文・絵『ぶんぶくちゃがま』（二葉書房1949）
・土家由岐雄文、高畠華宵絵「ぶんぶくちゃがま」（永晃社1950）
・浜田廣介文、河目悌二絵「ぶんぶくちゃがま」『こどもクラブ』（講談社1951）
・平井芳夫文、鈴木寿雄絵「ぶんぶくちゃがま」『小学館の幼稚園』（小学館1951）
・中村小波文、服部龍男絵『文福茶釜』（暁画劇社1952）紙芝居
・土家由岐雄文・絵、古藤幸年絵「ぶんぶく茶釜」（永晃社1953）
・水上不二文、石田英助絵「ぶんぶくちゃがま」『小学一年生』（小学館1953）

7　鈴木重三・木村八重子編（1985）『近世子どもの絵本集 江戸篇』岩波書店　p.490

8　平塚武二（1960）「「ぶんぶくちゃがま」について」『ぶんぶくちゃがま』講談社　頁数なし

（ささき　ゆみこ）

【受理日　2023年11月22日】